

ガラテヤの信徒への手紙 3 章 1～24 節

2020 年 1 月 22 日

古本 靖久

1、聖歌 274 番 「古い行い 改めて」

2、お祈り

3、今日の内容

熱心なファリサイ派であったパウロは、もともと教会やキリスト者を迫害していました。ステファノの殺害にも賛成し、その場面にもいました。しかしダマスコでの出来事をきっかけにパウロは回心し、福音を伝えていきます。ガラテヤはパウロが伝道旅行の際に、訪れた場所の一つです。

ところがパウロの耳に、ガラテヤの人たちの心が乱されているという話が聞こえてきます。そこでパウロは、ガラテヤの教会の信徒に向けて、手紙を書くことにします。これが今、わたしたちが聖書で目にすることができる「ガラテヤの信徒への手紙」です。

パウロはまず、自分は神さまによって使徒とされたことを強調します。それはガラテヤの人たちを惑わす人たちが、パウロはエルサレムの共同体では指導者として認められていないと言っていたからかもしれません。それ以上にガラテヤの人たちを惑わしたのは、「ほかの福音」というものでした。他の福音といっても、別に何かあるわけではなく、パウロが伝えた福音とは全く違うものでした。それは割礼を施したり律法を守ったりすることによって救われるというものだったのです。

そのことを論証するために、この手紙は書かれました。今回からいよいよ「福音の真理」に入っていきます。

導入	1 : 1～5	挨拶
	1 : 6～9	異なる福音
福音の啓示	1 : 10～12	神から示された福音
	1 : 13～24	啓示の前後
	2 : 1～10	エルサレム使徒会議
	2 : 11～14	ケファ(ペトロ)批判
	2 : 15～21	信仰による義
福音の真理	3 : 1～5	信仰と霊の受容
	3 : 6～14	信仰と祝福
	3 : 15～24	律法と約束
	3 : 25～ 4 : 11	約束の相続者
	4 : 12～20	パウロの受容
	4 : 21～31	二つの契約のたとえ
福音の自由	5 : 1～15	キリストの自由
	5 : 16～26	自由と愛
	6 : 1～10	霊の実
結語	6 : 11～18	まとめ

4、段落ごとに

◆信仰と霊の受容（3：1～5）

- 1 ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか。
- 2 あなたがたに一つだけ確かめたい。あなたがたが“霊”を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも、福音を聞いて信じたからですか。
- 3 あなたがたは、それほど物分かりが悪く、“霊”によって始めたのに、肉によって仕上げようとするのですか。
- 4 あれほどのことを体験したのは、無駄だったのですか。無駄であったはずはないでしょうに……。
- 5 あなたがたに“霊”を授け、また、あなたがたの間で奇跡を行われる方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなさるのでしょうか。それとも、あなたがたが福音を聞いて信じたからですか。

諸事情により、今回から 3 回でガラテヤの信徒への手紙を読み終える計画です。今日は 24 節分を学ぶことにします。それを 3 つに分け、解説し、分かち合いをしていきます。

さて、ペトロとの出来事を報告したパウロは、ここからいよいよ福音について語っていきます。洗礼を受ける前に学ぶ「教会問答」や教会の「教理」、また礼拝で唱える「ニケヤ信経」や「使徒信経」など、さまざまなところにパウロの福音理解は反映されています。

まずパウロはガラテヤの人たちに、過去に体験したことを思い起こすようにと促します。過去に体験したことはキリストの十字架の啓示であり、“霊”を受けたことでした。それは、「あれほどのこと」と言われるほどインパクトのあることだったようです。

それなのに「ほかの福音」に向かった彼らを、「物わかりの悪い」と形容します。この言葉は「愚かな」という意味です。洞察力が欠如しているさまをあらわします。その彼らを惑わした人たちがいます。惑わすという言葉は、悪意ある視線を他者に向けて災いを及ぼす魔術行為を示します。彼らの心変わりには、魔術の介入を疑わせるほどに、不可解なものでした。

そして“霊”を受けたのはどうしてなのかと問います。律法をおこなったからなのか、福音を信じたからなのかと聞くのです。ガラテヤ書の中では、律法の中でも「割礼」に焦点が当てられてきました。割礼は簡単に言うと、神さまとの関係性を独占することです。「選ばれた民」としてのアイデンティティを刻むことです。そして他民族を排除することです。

そして福音とは、神さまからのメッセージです。神さまの行為である福音に信頼を置くことが「信仰」だと言えらると思います。ガラテヤの人たちに対して、その福音に立ち返るよう、パウロは筆を進めていきます。

<ここまでの箇所から>

「あれほどの体験」とはどういうものなのだろうかと、考えていました。キリスト教には様々な教派があり、「聖霊の働き」を強調する人たちもいます。異言を語ることに関しては、パウロは否定的な見解を示しています。しかし“霊”についてはとても肯定的です。

聖公会でも堅信式では、主教は最後に「この僕に手をおいて、聖霊の特別な恵みを願い求めました」と祈ります。聖霊の働きは身近なものであるはずなのに、あまり語られないように思うのはわたしだけでしょうか。

◆信仰と祝福（3：6～14）

6 それは、「アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた」と言われているとおりです。

7 だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。

8 聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。

9 それで、信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されています。

10 律法の実行に頼る者はだれでも、呪われています。「律法の書に書かれているすべての事を絶えず守らない者は皆、呪われている」と書いてあるからです。

11 律法によってはだれも神の御前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです。

12 律法は、信仰をよりどころとしていません。「律法の定めを果たす者は、その定めによって生きる」のです。

13 キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。「木にかけられた者は皆呪われている」と書いてあるからです。

14 それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人に及ぶためであり、また、わたしたちが、約束された“霊”を信仰によって受けるためでした。

ここからパウロは、反対者がおこなってきたパウロ批判に対して反論していきます。反対者がガラテヤの人たちに求めていたのは、割礼でした。なぜ異邦人に割礼を施さないといけないのか、それには理由がありました。

創世記 17 章 4 節および 8 節にこのような記述があります。

「これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。……わたしは、あなたが滞在しているこのカナンすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」（創 17：4、8）

この契約は「双務契約」と呼ばれるものです。一般社会の契約同様に、お互いにやらなければならないこと（義務）が定められています。ちなみに片方だけが義務を負う契約を「片務契約」と呼びます。ノアの箱舟の「契約の虹」などがそうです。

ではこのときに、神さまはアブラハムに対して何を要求したのでしょうか。

神はまた、アブラハムに言われた。「だからあなたも、わたしの契約を守りなさい、あなたも後に続く子孫も。あなたたち、およびあなたの上に続く子孫と、わたしとの間で守るべき契約はこれである。すなわち、あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。(創 17:9-10)

これが、反対者がガラテヤの人に割礼を求める根拠でした。神さまに自分たちを守ってもらうために、割礼を受ける。割礼を受けることが、アブラハムの子孫としてのしるしとなるというのです。この指摘に対して、パウロは創世記 12 章の物語を持ち出します。

それは、アブラハムが 75 歳のときのものです。

「あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし あなたを祝福し、あなたの名を高める 祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」(創 12 : 1~3)

その神さまの言葉を聞いて、アブラハムは神さまを信頼します。神さまにすべてを委ねます。そして約束の地に着いたアブラハムに対し、神さまは言われるのです。

主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」(創 15 : 5)

この約束は先ほどの言葉を使うと、神さまからの一方的な「片務契約」です。

そして続きます。

アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。(創 15 : 6)

つまり「割礼を受けたから義とされた」前に、すでに「信じたことによって義とされた」のです。さらに「地上の氏族はすべて あなたによって祝福に入る」という約束から、祝福はガラテヤの人たちを含む異邦人にまで及ぶことが約束されているのです。

律法によっては、誰一人神さまの前に義とはされません。共同体の中では様々な献げ物などで「正しい者」とみさせられるかもしれませんが。しかし神さまから見たら、皆「呪い」の中に入れられるのです。

十字架によってその「呪い」の中に自らが入り、わたしたちを救い出してくださるのがイエス様です。その救いが、あなたたちにも与えられたはずだと、パウロはガリラヤの人たちに訴えているのです。

<ここまでの箇所から>

創世記の天地創造の場面で、神さまはおつくりになったものをご覧になりながら、「見よ、それは極めて良かった。」（創1：31）と語られました。またアブラハムの信仰を見て、それを義と認められました。

わたしたちは神さまの目から見て欠けが多く、完全な者ではありません。自分の力で正しい者にはなれないのです。しかし神さまはわたしたちを愛するがゆえに、わたしたちを呪いの中から救い出そうと計画されました。そしてイエス様を遣わされました。

そのイエス様にすべてを委ねて歩んで行くこと。それが信仰です。その信仰によってのみ、わたしたちは義とされる。それが信仰義認という福音のメッセージなのです。

◆律法と約束（3：15～24）

15 兄弟たち、分かりやすく説明しましょう。人の作った遺言でさえ、法律的に有効となったら、だれも無効にしたり、それに追加したりはできません。

16 ところで、アブラハムとその子孫に対して約束が告げられましたが、その際、多くの人を指して「子孫たちとに」とは言われず、一人の人を指して「あなたの子孫とに」と言われています。この「子孫」とは、キリストのことです。

17 わたしが言いたいのは、こうです。神によってあらかじめ有効なものと定められた契約を、それから四百三十年後にできた律法が無効にして、その約束を反故にすることは無いということなのです。

18 相続が律法に由来するものなら、もはや、それは約束に由来するものではありません。しかし神は、約束によってアブラハムにその恵みをお与えになったのです。

19 では、律法とはいったい何か。律法は、約束を与えられたあの子孫が来られるときまで、違反を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです。

20 仲介者というものは、一人で事を行う場合には要りません。約束の場合、神はひとりで事を運ばれたのです。

21 それでは、律法は神の約束に反するものなのではないでしょうか。決してそうではない。万一、人を生かすことができる律法が与えられたとするなら、確かに人は律法によって義とされたでしょう。

22 しかし、聖書はすべてのものを罪の支配下に閉じ込めたのです。それは、神の約束が、イエス・キリストへの信仰によって、信じる人々に与えられるようになるためでした。

23 信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。

24 こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。

パウロはここから、神さまの救いの計画について書きます。神さまはアブラハムに対して、片務契約を結ばれました。その一方的な愛を神さまが覆すことなどない、というのがパウロの論調です。割礼しかり、エジプト滞在から 430 年後にシナイ山でモーセに与えられた律法しかりです。それらが契約を無効にし、約束を破棄することはないのです。

ではどうして律法は与えられたのでしょうか。パウロはその契機と律法の有効期間、そして律法が与えられた経緯を述べます。

まず律法は、違犯を明らかにするために与えられました。原意は「逸脱」です。イスラエルの人々は神さまと契約したにも関わらず、神さまに対して不誠実な態度を取り続けました。そこできちんとした生き方を示すために、モーセを通して律法が与えられたのです。

次に律法は、子孫が来るまで有効だと書かれています。この子孫とはキリストです。イエス様も「律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている。」(ルカ 16 : 16) と語られています。

そして律法においては、モーセが神さまと民とを結ぶ仲介者になったと書きます。このため律法は結果的に民族を隔てましたが、キリストによって諸民族が一つの民(神の民)として集められる前の時代のものだということです。

律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となりました。律法によって、わたしたちは自分の罪深さに気づかされます。それが律法の役目なのです。子どもを教え導く大人のように、正しい道を示していくのが律法なのです。

<今日の箇所から>

なぜ割礼は必要ないのか。律法を頑張って守っても無駄なのか。パウロはそのような疑問に、丁寧に答えます。

本気で律法を守ろうとしたらどうなるのか。「聖書男」という本が一時期ブームになりました。聖書に書かれていることをすべて守ろうとしたそうです。結論から言うと、普段どおりの生活などできなかったようです。

なぜわたしたちにはイエス様が必要なのか。信仰に立って生きていくことの大切さなど、パウロの手紙は教えてくれるのです。

今回の学びは、これで終わります。次回は 2 月 27 日(木)10 時 30 分～で、「福音の真理／後半(ガラテヤ 3 : 25～4 : 31)」について学んでいきたいと思えます。(3 月は 26 日)